

令和 2 年度 ACTR

分類 番号	A13	取組 名称	荒廃農地で食用桜の葉(オオシマザクラ)を無農薬で収穫可能か ー 荒廃農地の有効活用による地域振興ー
研究代表者所属・職名：		生命環境科学研究科・助教	氏名： 糟谷 信彦
研究担当者： 京都府立大学（宮藤久士・池田武文・松谷 茂）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府与謝郡与謝野町商工振興課，くすぐるカード会			
【研究活動の要約】			
<p>桜の葉の国内消費の 60%が中国産，40%が国産(そのうちの 7 割が静岡県賀茂郡松崎町)で，国内の生産現場は高齢化が進んでいることから新たな産地が必要とされている。食用の葉については，明確な品質が求められるが，無農薬栽培であれば一層付加価値が高まる。</p> <p>1) 高品質な桜の葉が無農薬でも栽培可能な条件の検討を行った。具体的には，高さ 50cm で幹を切断した後に再生してくる葉について，毎月一回葉を採取，毎月 2 回葉を採取，放置区(最後に一度だけ葉を採取)の 3 処理区を設けそれぞれで葉のサイズ，品質，枚数を測定し，比較した。</p> <p>2) 食用の桜葉の商品化を自ら行うのか外注するのかについては，まだ苗木のサイズが小さかったため葉の採取にはもう一年待った方がよいとの専門家の指導により次年度におこなうこととなった。一方で地元では自ら商品化を行うべく，先進地視察を行っている。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>与謝野町の試験地において，葉の収穫を行わない C 区（対照区），月に一回葉を収穫する I 区，月に二回葉を収穫する II 区，の 3 つのブロックを設定した。2020 年 8 月から 10 月にかけて葉のサイズ，品質，枚数を測定し，比較したところ，II 区は葉が細くなり，かつ薄いという結果が得られ，収穫頻度によって葉の形や厚さが変化し，葉は 1 ヶ月で成熟することが明らかとなった。1 個体あたりの葉の収穫累積枚数を比較すると，C 区，I 区，II 区でそれぞれ 123 枚，81 枚，40 枚となった。一方，1 個体あたりの商品になる葉の収穫累積枚数は，C 区，I 区，II 区でそれぞれ 14 枚 (12%)，45 枚 (56%)，25 枚 (61%) という結果が得られた。C 区が，収穫累積枚数に比べて商品になる葉の収穫累積枚数がかなり少ないのは，I 区と II 区に比べて，害虫や病害などの被害を受ける暴露期間が長かったためであると考えられた。また，I 区と II 区を比較すると，I 区は，II 区に比べて商品になる葉を 2 倍近く収穫することができた。以上から，規格に合った，商品になる葉を大量に収穫するには，I 区の，月に一回葉を収穫する方法が一番適していると考えられた。</p>			
【研究成果の還元】			
<p>地元の方々には随時報告をし，その結果が 7 月に看板として付近の住民に説明がなされ（下記写真），新たに植栽間隔を広げた移植の試みとなっている（下記写真）。年度内の学会発表には間に合わなかったが（次年度に学会発表予定）地元への研究成果については十分に還元されたと考えていただければ幸いである。</p>			
【お問い合わせ先】			
<p>生命環境科学研究科 助教 糟谷 信彦 Tel: 075-703-5628 E-mail: n_kasuya@kpu.ac.jp</p>			

参考（イメージ図、活動写真等）

※試験地横に立てられた本研究の看板



※実際の試験地の様子



(左) 試験地の区画 (中) 共同作業の様子 (右) 測定作業中の写真



テープの着いているのが3月に移植された移植されたオオシマザクラ(落葉期)。もともと植わっていたのは奥の草地の場所である。



(左) 視察先の西伊豆町のオオシマザクラ畑 (2月, 植栽間隔 60cm) (右) 本試験地では植栽間隔 120cm